

「みどりの文」最優秀賞

手紙・エッセー

絵手紙

フォト

三浦美千子さん(東京)

佐藤 公子さん(福島)

佐藤 弘さん(西郷)

県造園建設業協会と福島民報社は二十七日、「みどりの文(ふみ)」手紙・エッセーと絵手紙、フォトの各部門の入賞作品を発表した。手紙・エッセー部門最優秀賞は東京都江東区の三浦美千子さん(25)の「癒しの森」、絵手紙部門最優秀賞は福島市の佐藤公子さん(76)、フォト部門最優

秀賞は西郷村の佐藤弘さん(76)の「緑のトンネルを行く」が受けた。日本造園組合連合会と日本造園建設業協会との後援。自然の大切さや庭のある暮らしの素晴らしさを再認識してもらおうと毎年開催しており、今年で十五回目。「私と庭」「自然の緑」「樹木の香りや感触」などをテーマ

に、四月二十八日(よい)にわ)の「庭の日」から作品を募集した。手紙・エッセー部門に四百七十通、絵手紙部門に二百八十七通、フォト部門に四百十八通合わせて過去最多の千七百七十五通の応募が

あった。審査には日本造園組合連合会の井上花子理事、福島建設工業新聞社の相沢隆社長、日本公園緑地協会の川端清道調査研究部調査役、県造園建設業協会の諸井道雄会長、福島民報社の沢井正樹広告局長が臨んだ。

表彰式は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、今年度の開催は見送る。

入賞者は次の通り。

- ▽優秀賞▽大塚道香(静岡) 森博子(群馬) 野有加利(静岡) 柴山仁美(茨城)▽入賞▽小川美奈子(白河) 宗近忠(神奈川) 小松崎有美(埼玉) 大塚優香(東京) 久家祥子(福岡)▽学校奨励賞▽奈良県立大淀高
- ▽絵手紙▽最優秀賞▽佐藤公子(福島)▽優秀賞▽降幡好華(長野) 武藤優一(福島) みしばたもつ(岡山)▽入賞▽江藤文生(郡山) 石井朝子(いわき) 角田トシ子、白田美紀子、高野幸子、植田マヤ子(福島)▽特別賞▽泉絵手紙グループ、いわき絵手紙グループ(いわき) たのしい絵手紙の会(福島)
- ▽フォト▽最優秀賞▽佐藤弘(西郷)▽優秀賞▽村上正幸(兵庫) 小柳光市、小田島史恵(郡山)▽入賞▽鈴木達也、斎藤京子(白河) 八島信夫、矢部美也(伊達) 成田清一(會津) 竹内将貴(長野)▽学校奨励賞▽興学社高等学院(千葉) 神津島村立神津島中(東京) 花園中高(京都)



絵手紙部門で最優秀賞に選ばれた佐藤公子さんの作品



フォト部門で最優秀賞に選ばれた佐藤弘さんの「緑のトンネルを行く」

癒しの森 三浦美千子 親友がうつ病になった。誰もが憧れる企業で部長に抜擢(はってき)され、これからやるぞ! という最中の発病だった。かつての運(うま)も、美しい姿はな、瞳から光が消え失せていた。生きろ、力をなへし、何を語りかけても心にあら

ず。友人の一大事に何のチカラにもなれず、私は途方に暮れた。虚しく時は過ぎ、焦りを覚えていたある日、父が何気なく語った「労働とは、地と、木々と、太陽と、そうした人間が到底敵わない、自然の大きなチカラとの繋がりを感じる」と。コンクリートの高層ビルに四六時中

詰め込まれていたなら、人間がおかしくなってしまう。だから私は、時間を見つけては畑を耕しに行っていた。土を踏みしめ、緑をその手に触れ、人としての心を取り戻していた。という言葉が、生まれ変わるキッカケとなった。

友人を森に誘い、ただ森を歩き、焚火をして食事する。二三日すると、硬かった表情が和らぐのがわかった。樹木に身を任せ、自然のめぐもりを感じ、森林浴に癒された友人が「安心する」と呟っていた。忙しい毎日、人間が本来持つ「感じる」チカラを奪う。競争社会に身を置き、正体の見えない不安を抱え、ある日それらがフワッと溢(あふ)れる。

半年の休養を経て友人は復帰した。以前の営業部ではなく人事部を志願し、人材育成に奔走している。自分のような社員を生まないため、森での合宿研修を企画したら友人は今、自然のチカラを借りて大事な仲間を守っている。